

生成AI時代の特許実務：弁理士は「書類作成者」から「知財の品質保証・戦略パートナー」へ

BEFORE AI

業務の変化：内製化と高度化の潮流

AFTER AI

初期の調査、ドラフト、翻訳、拒絶理由対応(OA)意の作成などが社内AIで実行可能になり、外部への単頼依頼は減少します。

単純な「文書作成」から「意思決定」へのシフト

初期の調査、ドラフト、翻訳、拒絶理由対応(OA)意の作成などが社内AIで実行可能になり、外部への単頼依頼は減少します。

企業知財部における内製化の進展

AIが大量の開示書や調査結果を生成するため、ノイズを分離し、法的・技術的に意味のある内容へ再構成する能力が事務所間に求められます。



AIにより文書作成の負担は減るが、その材料をもとに「どの権利を、どの範囲で、どの事業目的のために取得するか」を判断する重要性が高まります。



AI代替領域 vs 弁理士の核心価値

AIによる効率化(内製化)

弁理士・特許事務所の核心価値

- 💡 発明発掘：開発資料からの候補抽出・要約
- 🔍 先行技術調査：類似文献候補の抽出、文献要約
- 📄 明細書作成：背景技術、図面説明、定型表現
- 📝 OA対応：拒絶理由の要約、補正案の複数生成
- ⚙️ AIガバナンス：ログ取得、プロンプトの自動化

- 👤 発明者へのヒアリング、根本原理の抽出
- 🔍 検索戦略の策定、無効・侵害リスクの評価
- 📝 クレーム設計、上位概念化、将来の権利行使を見据えた記載
- ✍️ 補正の狭め過ぎ防止、進歩性ロジックの構築
- 👤 守秘義務、新規性、発明者認定の証拠管理

AI時代の新たな法的論点とリスク

- ⚠️ AI支援発明における「発明者認定」の壁
USPTOなどは「AIは発明者になれない」としており、自然人の具体的な蓄意(Conception)の証拠化が不可欠です。
- ⚠️ 知財品質保証としてのレビュー
AI文書の優正は単なる「修正」ではなく、ハルシネーション(虚偽情報)を防ぎ、特許として有効で事業価値を持つ権利に仕上げる「品質保証」です。
- ⚠️ 守秘義務と新規性喪失のリスク
外部AIへの機密情報入力による第三者への開示となる恐れがあり、向用規約の整備やクライアントの同意取得が新たな専門業務となります。

弁理士が担うべき「7つの新しい役割」



1. AI知財品質保証者
AI左記ドラフトで調査結果を速的・体系的に撮り出し、権利範囲や機密情報のリスクを低減させます。

2. 権利範囲アーキテクト
発明の率を最大化し、難関が困難な発明で発明可能なクレームを戦略的に設計します。

3. 発明創作プロセスの認識化交通者
プロンプトや出力、適切なコントロールを確保し、発明者側や買収・譲渡リスクに対する防御を固めます。

4. AIガバナンス設計者
学術論文や学習利用のルールを整理し、AI利用の効率化と法的完全性を両立させます。

5. グローバル制度差の翻訳者
国ごとに異なるAI関連法規の審査発換や発明者側との基準を積極的に管理します。

6. 事業・競争戦略パートナー
特許情報と市場動向を統合し、照徹をコストではなく事業成長の手段へと変換させます。

7. AIを使う専門家集団
自らAIを使いこなし、高自費・高透明・透明なサービスを提供して競争力を維持させます。

実務のシフト：後工程から前工程へ



従来型：文書作成中心の「後工程」

提案書を受け取ってから明細書を書き、拒絶理由が来たら対応する受動的な関与。



AI時代：領略設計中心の「前工程」

発明提案書の作り方から周知し、出願時点で種々の仮説や外販対応を想定したセットを設計する積極的な関与。